

住んでみたスウェーデン バリアフリーな暮らしづくり

理学療法士

田中幸子

私は1995年4月から翌年3月までスウェーデン、ウップサラ市近郊に家族(夫、二人の子ども)と共に住んでいました。その間、スウェーデンに住民登録をし、スウェーデン人と同じ福祉(選挙権以外は外国籍でも差異はない)を体験しました。スウェーデンといえば、「高福祉・高負担」で有名ですが、私共はさしあたり「高負担」する側に入るのでしよう。スウェーデンには日本から数多くの視察団がやってきますが、「高福祉」ばかり紹介されて、「高負担をする人がたいへん」とお考えの方も多いと思います。

さて、実際に住んでみたスウェーデンはこんな所でした。

情報と違う!

スウェーデン行きが決まったときから、スウェーデンに関する本を読んだり、情報を集め、準備をしました(夫は研究者で、資料は山ほどあった)。そして一応の知識を詰め込んで飛行機に乗ったつもりです。ところが、現実とは違う……

その原因は二つあります。

(1)「スウェーデンは実験国家」と言われるように、社会システムがどんどん変わる。市役所に行き、「このシステムを利用したい」と言ったら、「それは去年廃止された」と言われ、がっかりしたことがありました。私の滞在中にも、消費税の大幅な引き下げ(食料品

のみ)・児童手当の減額・医療費値上げ等がありました。

(2)地方分権が進んでいること。

スウェーデンの自治体(日本の市町村にあたるコミュニティ)は大きな権限と独自性を持っていて、財源も豊かです。同じ時期にスウェーデンを視察しても、首都のストックホルムと南のマルメでは内容の違う報告書ができることもあるのです。

という訳で、これから私が述べる内容は、スウェーデンの一般論ではなく、一都市で私が実際に経験したことに限ります。私が住んだウップサラは首都ストックホルムより北に70キロ、人口18万のスウェーデン第4の都市で、大学や研究所を多数かかえる学園都市

です。東広島と共通点が多いかも知れません。

車いすと乳母車が多い街

ここは福祉の国だ、日本とは違うと思うことがよくありましたが、何とんでも一番違うのは街で見かける車いすの多さでしょう。そしてついでに乳母車も多い(日本のベビーカーなどというコンパクトなものではなく、大型の乳母車)。街全体がバリアフリーですから、車いすの人も乳母車を押しただお母さんも、繁華街に出たり、どこへでも出かけて行けます。乳母車ごとバスに乗ることも、ここでは簡単なことなのです(日本のように、赤ちゃんを抱いて荷物を持ち、疲れきって電車に乗っている母の姿を見ることはない)。

段差には必ずスロープがあり、デパートやレストランには障害者用トイレがついています(マクドナルドにもスロープ、障害者用トイレがある!)。車いすの人の中



には、自分で便器に乗り移れない場合もあるので、介助の人が一緒に入れる広いスペースが確保されています。この障害者用トイレはたいていの場合、婦人用と兼用になっていて、広いので乳母車ごとトイレに入れるし、中には折りたたみ式の台もあり赤ちゃんのおむつを替えられるし、なかなかの優れたものです。中に手を洗う水道が付いているのもいい。導尿といって、管で尿をとる人には大切なことです。小さなレストランでは、障害者用トイレが一つだけあり、健常者も一緒に利用しているところが多いです。老人や障害者にや

さしい街づくりが市民に与えている恩恵は多いのです。

杖で歩くのが難しいお年寄りも、歩行器を押してなら歩けることがよくあります。日本では病院や施設でよく見かける歩行器ですが、残念ながら、それ以外では実用性がありません。段差の有るところでは使えないのです。バリアフリーな街、スウェーデンでは歩行器を押したお年寄りが、ほとんど外へ出て、自立した生活をおくっています。

補助器具センターにて

この国には障害者手帳制度がありません。「スタンダード保障」といって、老人でも障害者でも必要ならば誰にでも平等に援助をする、というのが原則です。障害の原因は、先天性のもの・事故や病気によるもの、と個人差が大きく、どの補助具が必要かは年代や生活状況によっても違うので、それらは一切問われません。車いす、

歩行器、便座等の補助具がほしい時は作業療法士等の認定を受けて、専門家とどれにするか相談すればいいのです。

日本の場合、例えば車いすは、個人に交付するという形を取りますから、その人に合わなくなったり、不要になると、使用可能な状態でも捨てられがちです。もったいない話です。スウェーデンの場合、補助器具は貸し出すものです。その人が不要になったら返却し、修理・消毒して再利用するのです。

種類も豊富(生活用具だけでなく、おもちゃやレジャー用品も)で一人で何種類でも借りることが



でき(必要性が認められればの話ですが)、必要がなくなったら、返して、リサイクルできます。しかも無料!——

電動浴槽や階段昇降機も含めてですよ——

そうした業務をする公立の補助器具センターが各都市にあり、専門家が配置されています。在庫も多く、迅速な対応が可能です。補助器具センターを見学した時、こうした話を聞き、「すばらしい」と感心していたら、「一つだけ困ることがある」と係りの人が言います。「税金が高くなることだ」(そりゃそうでしょう)。「でもあなたも私も明日のことはわからないのだからね」と言われ、またまた「すばらしい」となった私でした。

バリアフリーな住宅

私が住んだアパートはバリアフリー住宅でした。床に段差が無く、入り口も緩やかなスロープ。エレベーター付きです。「最初からきちんとした計画を行えば、普通のアパートに障害者が住めるし、改修も楽」という訳で建築法改正後にできたスウェーデンのアパート

は皆こうです。さて、住んでみて感じたことは……。

引越しが楽。アパートの入り口に車を止めて、後はキャリーに荷物を乗せて部屋の中まで直進です。5階に住んでいたのですが、自分たちで引越しができました。スウェーデンでは引越しは業者頼みならず、自分たちでするのが普通です。なにしろバリアが無いのですから楽々できます(とても安上がり)。

スウェーデンでは、普通のアパートの一角を借りて、グループホームを作る例もありますが、バリアフリー住宅ならでのことでしょう。

福祉とは

日本で福祉というと、障害者やお年寄りのためというイメージですが、スウェーデンではもっと幅広い概念です。教育費は小学校から大学まですべて無料です(ノートや鉛筆もくれる)、公共の成人教育、例えば、私が通っていたス

スウェーデンで見つけた、こんなもの

切り替え式自動ドア

自動・手動両用の押開き式ドアで、通常は手で押して開けるのですが、入り口付近のボタンを押すと自動的にドアが開きます。自動ドアの前に立っただけで、開けるつもりがないのにドアが開いてしまったという経験は誰でもあると思います。これはボタンを押した時だけ電動になるドア。電気代の節約になりそうだし、なにより、必要に応じたサービスという点で、気に入っています。

音のする信号機

視覚障害者用に、青になると「とおりゃんせ」の音楽が鳴る信号機はおなじみでしょうが、スウェーデンでは赤のときもカチカチという静かな音が鳴り続け、交差点の存在を教えます。そして青になるとカチカチの音が大きく、速くなり、青が終わりそうになると、更に速くなって、危険を教えます。歩行者用の信号機はすべて音がします。

スウェーデン語学校も無料で、その

内容はなかなかのものでした。子どもがいれば、一人目から児童手当が出てきますし、つまり、全国民のための福祉なんです。それぞれ年代・状況に応じたサービスが受けられるのが福祉の基本。私たちは子どもの教育や、老後に備えて民間の保険に入ったり、貯金をしたりしますが、その分を国に預けていると思えばいいのではない

でしょうか？

「高負担」と言われていますが、私はスウェーデン政府には十分良くしてもらった、元は取ったと感謝しています。

どうしたらよいサービスが提供できるのか

スウェーデン人の調査・統計好きは有名でして、私も滞在中に何種類かアンケート用紙が送られて

きました。郵便局のアンケートで、「ポストの高さはちょうどいいか?」という項がありました(スウェーデン人の平均身長は高く、日本人より高いところにポストがある)、車いすの人がどんな外に出ていく国らしくていいなと思ったのを覚えています。それからしばらくしてその集計結果も送られてきました。当事者の意見を聞き、分析して、結果をきちんと報告する。専門家の抽象的な意見よりも、具体的なニーズを大切にするわけです。「実験国家」はこのような準備の上に築かれているのです。

福祉の街づくりと言っても一人ひとりの要望は違って当然じゃないでしょうか。スウェーデンは、あくまで、具体的に現実に対応しようとしているのです。私は初めに、社会システムがどんなに変わるか、地域差が大きいことをスウェーデンの特徴として述べましたが、その理由が御理解いただけたいと思います。